

## *have* + 目的語 / 補文構文のスキーマ的意味

月 足 亜由美

### The Schematic Meaning of the *Have* + Object/Complement Construction

TSUKIASHI Ayumi

**Abstract:** Both the *have* + object construction and *have* + complement construction can be interpreted in various ways and the meanings of the verb *have* look different in each instance. Taking their various meanings into account, the schematic meaning of the *have* construction can be reduced to the ideas that “the subject of *have* is cognitively close to its object or complement” or “the subject of *have* ‘possesses’ its object or complement within its sphere.” All the *have* constructions can be considered to have this core meaning. The natures of the objects and complements of *have* differ in each individual instance, and so do the natures of the subjects of *have* in relation to them. Their differences give the verb *have* and the construction a number of different meanings. We assume that when the *have* construction is completely stative, it is analogous to the setting-subject construction which Langacker (1991, 2000) argues.

#### 1. 序

普通動詞 (ordinary verb) または語彙動詞 (lexical verb) *have* は後ろに目的語または補文 (目的語 + 動詞の不定形 / 分詞形) を伴って用いられる。*have* + 目的語構文について, Langacker (1991, 2000) は (1) の文を挙げ, それぞれの *have* の意味は異なっているとす。 (1 a) では主語が目的語を自分のコントロール下においているが, 下の例へ行くにつれてそのコントロール力は弱くなり, (1 e) にはコントロールや所有の意味はなく, target を位置付けるための参照点 (reference point) として機能しているだけである。

- (1) a. Watch out — he has a gun!  
 b. I have an electric drill, though I never use it.  
 c. They have a good income from judicious investments.  
 d. She often has migraine headaches.  
 e. He has a lot of freckles.

(Langacker 2000 : 183)

確かにこれらの動詞 *have* の意味は少しずつ違っているが, これらの文に共通しているのは, 「主語と目的語が認知的に近い」ことを表している点である。この *have* 構文のスキーマ的な意味については様々な研究が行われている (池上 1981, 1989, 2000, Dąbrowska 1997, 中村 2001) が, 本稿の目的は, これがどういふことかを明確にすることである。そのためには動詞 *have* が出現する事例を広く見る必要があると考え, *have* + 目的語の文だけでなく, *have* が補文を伴う場合も考察の対象とする。補文が後続する構文でも, 「主語と補文が表す事象とが認知的に近い」と考え, それがどういふことなのかを明らかにしたい。

#### 2. *have* + 目的語構文

*have* + 目的語構文の表す意味は様々にタイプ分けされるが, そのように意味が微妙に違うのは, 主語・目的語の性質, 主語と目的語との関係など, 個々の事象のあり方が異なるからだと考えられる。ここでは, この構文の意味を次の3タイプに分けて考察を進める。

①所有 (possession)

(i) 分離不可能な所有 (inalienable possession)

(ii) 分離可能な所有 (alienable possession)

②場所的な存在 (location)

③経験 (experience)

第一の意味に挙げた〈所有〉は、さらに〈分離不可能な所有〉と〈分離可能な所有〉に分けられる。(2

a) は前者の例, (2 b) は後者の例である。

(2) a. John has a big nose.

b. John has five bucks. (Belvin 1993: 65)

〈分離不可能な所有〉には (2 a) のような body-part (whole-part の一種) 関係のほか, 親族関係 (e.g. *I have two sisters.*), 内在的・永続的な属性 (e.g. *He has a terrible temper.*) を表す場合などがある。(2 b) が表すような〈分離可能な所有〉では, 目的語は主語の意思のコントロール下にあり, 主語がその所有をやめようと思えばいつでもやめることができるという特徴がある。Belvin (1993) は〈分離可能な所有〉を “a semantic variant of the semantic notion of control” と捉えており, control の意味的定義は (3) のようなものだとしている。

(3) control: “the possibility of canceling what is denoted by the predicate if the subject of this predicate decides to stop doing it.”

(Belvin 1993: 67)

前節で挙げた例文では (1 a), (1 b) が〈分離可能な所有〉に相当し, Langacker も (1 a) は “immediate physical control” を表すとしている。今まさに銃を持っている状況であり, 主語は自分の意思でいつでもその所有を中止することができる。

次に, have + 目的語構文の第二の意味として挙げた〈場所的な存在〉(location) を考えてみよう。

(4) a. We have a lot of skunks around here.

b. They have armadillos in Texas.

(Langacker 2000: 185)

Langacker はこれらの文は参照点構造を持ち, 主語は場所的な参照点であり, target (目的語) が存在する領域 (dominion) を指定しているとする。主語の *we* と *they* は特定の人々ではなく, 前置詞句が表す場所にいる人々 (住民) 全般を指している。前置詞句を取り去ると, 特定の人々 (*we, they*) と目的語の間の

〈分離可能な所有〉を表すことになる。ある特定の人物が主語の場合も, 〈存在〉を表すときは, 場所を指定するための前置詞句を伴う。前置詞句がない (5 b) は「クモを飼っている」という〈所有〉の意味になる。

(5) a. John has a spider on his arm.

b. John has a spider. (Belvin 1993: 68)

これに対し, 主語が無生物であると, 前置詞句のない文は〈所有〉の解釈も得られず, 非文になってしまう。Belvin は, この (5 b) と (6 b) の容認度の違いは, *John* は目的語を自分のコントロール下におくことができるが, *the drawer* には意思がなくそれができないことに起因すると述べている。

(6) a. The drawer has five bucks in it.

b.\* The drawer has five bucks.

(Belvin 1993: 65)

しかし, 主語が無生物で, (6 a) と同様「そこに〜がある」という意味のときでも, 前置詞句なしで容認されることがある。

(7) a. The room has two windows in it.

b. The room has two windows.

(池上 2000: 213)

池上は, (6 a) のような文と (7 b) との違いを, 〈トコロ〉から〈モノ〉への転化の度合いの違いとして説明している。*be* 動詞を使ってこれらの文とほぼ同じ意味を表すことができるが, *have* 構文で主語になる名詞句は, *be* 構文では場所を示す前置詞句の一部であり, 〈トコロ〉として言語化されている。

(6) a'. Five bucks are *in the drawer*. / There are five bucks *in the drawer*.

(7) b'. Two windows are *in the room*. / There are two windows *in the room*.

(池上 2000: 213)

これらの前置詞句の中の名詞句を主語にして *have* 文で概念化した場合, (6 a) で前置詞句を残しておく必要があるのは, *the drawer* がまだ〈トコロ〉としての意味合いを持ち, 話し手がこれを〈モノ〉として主語

化したのにも関わらず、もう一度文末で〈トコロ〉として捉え直す必要があるからである。一方、(7b)の *the room* は〈モノ〉への転化が進んだ段階にあるので、文末の前置詞句を必要としない。

ここまでで取り上げた〈所有〉と〈場所的な存在〉が同じ動詞 *have* を用いて言語化されるのは、これらの概念間に共通点があり、一方から他方への転化が可能であることと関連している。これについては池上(1981)などで論じられている。

(8) X BE WITH Y (池上 1981: 183)

(8) は〈場所的な存在〉の表現の基本型で、X と Y の場所的な近接を表す。この Y が人間であると、〈場所的な近接〉が〈Y に対する所属〉、そして英語においては動詞 *have* を使うことで〈Y による所有〉という捉え方に転化する。Miller & Johnson-Laird (1976) も「場所的な近接関係」があれば、その近接しているモノを自由に使えるという、(一時的ではあるが)〈所有〉関係が生じると主張している。同様の捉え方をしている Lakoff (1993) の、*trouble* の例と引用を見よう。

- (9) a. I'm in trouble. (Trouble is a location)  
 b. I have trouble. (Trouble is an object that is possessed)

In both cases, trouble is being attributed to me, and in both cases, trouble is metaphorically conceptualized as being in the same place as me (co-location) — in one case, because I possess the trouble-object and in the other case, because I am in the trouble-location. (Lakoff 1993: 225)

このように〈所有〉と〈存在〉は主語と目的語が「同じ場所にいること」(co-location) という点でつながっている。

*have* 構文の意味として、もう一つ「経験として持つ」というものがある。つまり、目に見えたり触れたりして知覚できるモノではなく、概念的なものやコト的なもの(事象または出来事: event) が目的語に来ることがある。その場合、知覚できない事象をモノであるかのように捉えて、主語がそれを「持っている」とする概念化が行われている<sup>1)</sup>。あるいは、目的語は知覚可能なモノであるが、それを「持つ」ことが〈所

有〉や〈存在〉とは言えないような場合である<sup>2)</sup>。この *have* 構文の意味を〈経験〉(experience) と呼ぶことにする。アスペクト的に見ると、〈所有〉〈存在〉は状態を表し、*have* は不完結動詞(imperfective verb)として使われているが、〈経験〉のときはプロセスを表すことがあり、その場合 *have* は完結動詞(perfective verb)として用いられている。例を挙げてみる。

(10) 〈経験〉のうち、

- ①状態を表すもの: *have a headache / a cold / a high temperature / a good memory / an idea, etc.*  
 ②プロセスを表すもの  
 a. 内的な終結点を持たないプロセス:  
*have a good time / fun / trouble / difficulty, etc.*  
 b. 内的な終結点を持つプロセス:  
*have a party / lunch / dinner / a nice day / a good vacation / a seat / a letter / a win / a look / a walk / a drink, etc.*

目的語が表す事象を我々が「経験として持つ」方法として、大きく分けて2種類の方法が考えられる。一つは、主語が何らかの行為を行ってその事象を「持つ」ことになる、言い換えればそれを「持つ」ために主語のコントロールが必要なケースであり、もう一つは、主語が意図もコントロールもしないのに事象が発生し、それを「持つ」ことになってしまうケースである。後者の例として、(10)の中では①の状態を表すものと、*have trouble / difficulty* がこれに当たり、その他のものは前者の「持ち方」を有していると言えよう。

本稿では *have*+目的語文の意味を〈分離不可能な所有〉〈分離可能な所有〉〈存在〉〈経験〉に分類したが、個々の *have*+目的語構文がこのうちの一つの意味と一対一で対応しているわけではない。Palmer (1974) は *have* に「ふつうの意味の所有」を表す“stative use”と、経験、達成、何らかの行為などを表す“dynamic use”の二つの用法があるとし、以下の例を挙げています。

- (11) We had sandwiches.  
 →a. “We took sandwiches with us.”  
 b. “We ate sandwiches.”  
 (12) She had a son.  
 →a. “She was the mother of a boy.”  
 b. “She gave birth to a son.”

(Palmer 1974: 162)

それぞれの a. が “stative use”, b. が “dynamic use” に相当する。a. は時間的に広がりのある状態を表すのに対し, b. は主語が「サンドイッチを食べる」「男児を生む」というプロセスを経ることを表している。前者は本節での分類の〈所有〉に当たり, 後者は何らかの行為, 働きかけが伴う〈経験〉を表していると言える。

本節では, *have* + 目的語構文の表す意味を〈所有〉〈存在〉〈経験〉に分け, これらの概念の間に共通点があることを見た。まず〈所有〉と〈存在〉の間には, 同じ場所に存在しているという共通点があり, 同じ場所ないしは近くにいるからこそ一方が他方を〈所有〉し, 場合によっては自由に使うなどといったコントロールをする(〈分離可能な所有〉)ことが可能になる。また, 〈所有〉と〈経験〉は, 何かを「持つ」という点でつながっており, 前者の場合は知覚可能なモノを持つのに対し, 後者においてはモノではないものを比喩的にモノとして捉えてそれを経験として持つという違いがある。よって, この三つの概念が共通して持っている, *have* + 目的語構文の意味的基盤は「主語と目的語が認知的に近い」または「主語が目的語を持つ」というものである。動詞 *have* の意味が微妙に違ったり, 完結動詞としても不完結動詞としても現れるのは, 主語・目的語の性質や両者の関わり方, つまり「持つ」方法に応じて出来事のあり方が異なってくるからだと考えられる。

### 3. *have* + 目的語 + 動詞の不定形/分詞形

本節では *have* が補文を伴う構文を考える。この構文も, 主語と補文事象が「認知的に近い」という意味を *have* 構文のスキーマとして持っている。この構文は〈使役〉〈受益〉〈被害〉など様々に解釈されるが, これらの解釈の違いは補文事象のあり方とそれに対する主語の関わり方の違いから生じるものである。ここでは, この構文の意味を〈使役〉〈経験(受益または被害)〉〈完了〉の三つに分け, どのような要因によりこれらの意味が生じるのかを見ていくことにする。

#### 3. 1. 〈使役〉

この解釈が生じるのは, 主語が何らかの働きかけを行って補文事象を生起させるという場合である。Ritter & Rosen (1993) の説明を見てみよう。

(13) John had half the students walk out of his lecture.

- a. *walk out* | -walk out of class- |  
 b. *have & walk out* | -cause- | -walk out of class- |  
 c. | -walk out of class- | -Exp.→  
 Ritter & Rosen (1993: 525)

動詞 *have* は補文事象にもう一人の参加者 (participant) を加えるが, それが補文事象と結び付くために補文事象が二通りに延長される。(13 b) では事象の始点 (beginning point) が延長され, *John* はそこに関わる使役主となり, 〈使役〉の解釈が生じる。(13 c) では事象の終点 (endpoint) が延長され, そこに生じている結果状態があり, *John* はその経験者となる。補文動詞が *-ed* 形の〈使役〉の例も見てみよう。

(14) The NWAA is already having an independent inquiry carried out by a leading firm of consultants. (Ikegami 1989: 200)

進行形で用いられていることからわかるように, この動詞 *have* は動作動詞または完結動詞として用いられており, 主語は補文事象の生起に対して何らかの力の行使を行っている。

非対格動詞 (unaccusative verb) が表す事象はその始点に対して第三者が働きかけることはできないので, 非対格動詞を *have* 〈使役〉文の補文に持つことはできない。

(15) a.\* Ralph had Sheila die.

b.\* Ralph had Sheila fall down.

(Ritter &amp; Rosen 1993: 526)

Ritter & Rosen も述べているように, (15 a) において例えば *Ralph* が映画監督, *Sheila* が女優で, 映画の中で「死なせる」という, 「*Sheila* が死ぬ」事象を意図的にコントロールして引き起こすことができる特殊な状況であれば, この文の〈使役〉解釈は可能になる。

主語は意図して補文事象の使役主となるわけであるから, たまたま補文事象が発生してしまったという状況では *have* 構文は使われない。

(16) a. John had Mary jump off the bridge.

- b. John made Mary jump off the bridge.  
(Dabrowska 1997: 146)

(16 a) は *John* が *Mary* に飛び降りるよう誘導したという解釈しかできないが、(16 b) はそれに加えて、*John* の不注意などで、見ていない間に飛び降りるをさせてしまったという解釈も可能である。

*have* <使役> 文は主語の言葉などによるコントロールで補文事象が引き起こされることを表すので、言葉によるコントロールのできない無生物は主語として言語化されないが、これも *make* 構文との違いの一つとしてしばしば指摘される。

- (17) a.\* Poverty had her work.  
b. Poverty made her work.  
(Dabrowska 1997: 146)

しかし、補文の中の動詞が *-ing* 形だと無生物主語でも容認される例がある。

- (18) a. The story about the rampaging mother had the children cleaning their rooms immediately.  
(Brugman 1996: 48)  
b. (?) The cold had us running upstairs to get our sweaters.  
(Dabrowska 1997: 219)

どちらの例も、目的語の人物が主語に触発され、補文の行為を行おうという気持ちになったという意味である。<使役> のプロトタイプは命令などにより力を行って行うものであろうが、この (18) では主語のコントロール力は弱いものの、確かに主語が原因で補文事象が起こったという関係があり、<使役> のプロトタイプからの拡張と言える。このように *have* <使役> 文にも様々なタイプのものがあることを考えると、その共通スキーマは「主語と補文事象が近い」または「主語が補文事象を持つ」としか言えず、コントロールや働きかけの強さは一様ではないと考えなければならない。

無生物が主語になる例については、*make* 構文との違いに関連して4節でも取り上げる。3.2. では<経験> に解釈される *have* 構文について見てみよう。

### 3.2. <経験>

補文事象が終結し、生じた何らかの結果に主語が影響を受けている、(13) の例で言えば (13 c) のと

き、この解釈になる。その影響が主語にとって好ましいものならば<受益>、好ましくない影響ならば<被害>を表すことになるが、このどちらになるかは語用論的にしか決定できない。<使役> の場合と異なり、主語は補文事象の原因になるわけではないので、外的要因なしで自ずから生起する出来事を表す非対格動詞が補文に現れることができる。

- (19) a. Ralph had Sheila / his goldfish die on him.  
b. Ralph had his daughter fall and break her leg.  
(Ritter & Rosen 1993: 527)

事象が終結し、主語が影響を受けるような結果が生じていなければこの解釈は生じないので、終結点のない、Vendler (1967) の分類で言えば活動 (activity) に相当する事象が補文に来ると、<使役> 解釈の可能性だけが残る。また、補文動詞が *-ed* 形の場合は容認度が落ちる。

- (20) a. I had the boys play soccer. → <使役>  
b.\* I had soccer played by the boys  
(21) a. I had Mary play the piano. → <使役>  
b.?? I had the piano played by Mary.

しかし、「*Mary* にピアノを弾かれた」ということが完結した事象として捉えられ、それにより主語が心理的影響などを感じている状況なら、(21 b) の容認度は上がる。

3.1. で<使役>、本節で<経験> に解釈される *have* 構文を見てきたが、池上 (1981) で論じられているように、これらの概念はいわば表裏の関係にある。池上は<使役>→<受身>の表現のもとになる場所理論的な構造型は (22) のようなものだとしている。

- (22) a. X GO / COME FROM Y  
b. X GO / COME TO Y (池上 1981: 183)

両方の X に<出来事>を表す項、そして Y に地点やモノではなく<人間>が入ると、この構造型が<場所的な変化>から (22 a) は<使役>、(22 b) は<受身>を表すものへと転換する。この考え方で *have* 構文を見てみると、X 項に補文事象、Y 項に主語が入り、(22 a) は<使役>、(22 b) は<経験>を表すことになる。作因・影響関係の方向を矢印で表してみると (22 a) は Y (使役主)→X、(22 b) は Y (経験者)←X と

なる。しかし、個々の文はこのうちのどちらかであるといつも言い切れるものであろうか。卑近な例で考えてみよう。

- (23) a. John had his secretary type the letter.  
b. John had the letter typed by his secretary.

(23) の例は通常〈使役〉に解釈されるので、作因・影響関係は [John]→[his secretary type the letter]/[the letter typed by his secretary] となるであろう。上司である John が命令、依頼などして補文事象を引き起こしているのだから〈使役〉であるが、その補文事象が終結したあとで振り返ってこの文を発した場合、〈使役〉とは逆方向の [his secretary type the letter]/[the letter typed by his secretary] → [John] という影響関係が同時に生じていると考えることも可能である。例えば、手紙をタイプしてもらってほっとしている、といった心理的状态を経験している場合などが考えられる。そうすると、我々は文が発話される各場面においてそれを〈使役〉か〈経験〉のどちらかに解釈するわけだが、もう一つ、〈使役〉の部分も〈経験〉の部分もまとめて一つの事態であり、それを主語が「持つ」という意味を表し、〈使役〉とも〈経験〉とも判断し難い場合があると言える。別の動詞で考えてみよう。

- (24) Bill broke his arm in a car accident. / lost his job in the recession. (Ritter & Rosen 1993: 524)

Ritter & Rosen も述べているように、「腕が折れている」/「失業している」状態は事故のあとしばらく続くのでその事象を Bill は経験していると考えられるが、同時に、Bill は「腕が折れる」/「失職する」という出来事を引き起こした使役主(原因)ともとれる。つまり、主語は〈原因〉でも〈経験者〉でもあるのである。

have 構文の例をさらにいくつか見てみよう。映画「スモーク」の中で、ある登場人物が数年前の交通事故で同乗者を死なせてしまったという話をする。その事故の前に神が自分に対して言った言葉として語る台詞である。

- (25) "Then I'm gonna have you crash that car, kill the woman that loves you."

主語の I (神) は補文事象を発生させているが、その

事象により何らかの影響を経験しているとは考えられない。補文事象 [you crash that car] は主語とは関係のない、その登場人物の人生の中で起こることだからである。形式的にも、補文の中に主語に関連する(そして refer back する)語句は見当たらない。よって、この例は〈使役〉の解釈をほぼ一義的に得る。次に、〈経験〉の解釈しかできない例を見てみよう。漫画「ピーナッツ」の中の、主人公スヌーピーの台詞である。

- (26) I hate getting old, and having my ears turn gray...  
(ボクはだんだん年を取って行って、自分の耳が灰色になっていくのはいやだよ...)

これは前に見た(19)と同様、非対格動詞が補文に来ている例である。主語が補文事象を引き起こすことはできないので、主語は経験者にしかならず、文の解釈は〈経験〉に限定される。もう一つ、「ピーナッツ」にある例を考えてみる。登場人物マーシーが自分の指、鼻、髪、足をバインダーにはさまれている状況で発している。

- (27) Yes, Ma'am, I know... I've had my fingers, my nose and my hair caught... and now my foot...  
(はい、先生、分かっています...前に指も鼻も髪もはさまれて...今度は足です...)

はさまれている状態を経験しているわけだが、その補文事象の原因になったのもやはり主語の「自分」である。先に見た(23)と同様、〈使役〉の部分と〈経験〉の部分を含めた事態全体を主語が「持った」という意味を表している。

このように、主語がある事象の経験者でありながら使役主や原因でもある場合が存在することを考えると、この構文のスキーマ的意味は「主語と(始点から終結点まで含めた)補文事象が認知的に近い」というものであって、「主語が力を行使している」または「主語が結果状態を経験している」というスキーマ化はできない。

### 3.3. 〈完了〉

have + 目的語 + 動詞の文が〈使役〉とも〈経験〉とも解釈されず、動詞 have が状態動詞または不完結動詞として使われているケースがある。このケースでは

have が状態を表しているの、進行形にはならない。

- (28) a. Sitting there, facing Bond Street, he had his face turned to the sea.  
 b. His head was bent, he had his hand clasped behind his back. . .  
 (英語語法大辞典 p. 808)

この種類の例は、補文動詞が *-ed* 形の他、(29) のような *-ing* 形、形容詞のものは存在するが、不定形のものは見当たらない。

- (29) a. I have two buttons missing (on my jacket).  
 b. The porter has a taxi ready.  
 (Quirk et al. 1985 : 1411)

類似する例に関して Ikegami (1989) は、補文の過去分詞が動詞としての性質を失い、形容詞に近づくにつれて、意味の焦点 (semantic focus) が *have* へ移行し、*have* が状態を表すようになるという説明をしている。例えば (30) のような例である。

- (30) Red Cross has his sword raised. . . in the next picture he has wounded the dragon.  
 (Ikegami 1989 : 203)

補文が状態を表すのに伴い、*have* の意味はそれを「持っている」という意味に近づくのである。

同じ *have*+目的語+ *-ed* 形の文で〈使役〉〈経験〉に解釈される文、例えば *I had my watch repaired.*, *I had my watch stolen.* では、文の主語以外の人物が補文事象の行為者である。一方、(28)~(30) の例では、主語と補文事象の行為者が同一人物であるという違いがある。それならば、現在完了形とどう違うのかという疑問が湧く。例として次の二文を比べてみよう。

- (31) a. They have their work done.  
 b. They have done their work.  
 (英語語法大辞典 p. 807)

直感的に感じられるのは、(31 a) では誰が仕事を終えたのかは重要な問題ではなく、とにかく「終えてしまっている」という結果状態に焦点が当たっていることである。仕事を終えたのは主語の *they* かも知れな

いし、それ以外の人かも知れない。これに対し、(31 b) では仕事を終えたのは主語の *they* という解釈に限定される。前節の〈経験〉の例であるが Dabrowka (1997 : 152) も、*Herman had his nose broken.* と *Herman has broken his nose.* という文を挙げ、前者では *have* の主語は補文事象 (nose-breaking) を生起させた人物とは別の人物であり、それはこれら二つの動詞 (*have* と *broken*) が分離していることに象徴的に現れていると述べている<sup>9)</sup>。この、現在完了形との相違点は、本稿で繰り返している「*have* と補文事象が近い」という捉え方の妥当性を裏付けるものである。補文事象の行為者だけに焦点を当てるのではなく、*have* の主語が補文事象全体を「持っている」ということを表しているのである。

この〈完了〉を表す *have* 構文では、主語が第三者に向かってコントロール力を発揮するわけではなく、また、進行形にならないことも考えると、Langacker が「参照点の機能を持つ文」として挙げた (4) のような文に類似していると言える。〈使役〉〈経験〉文では主語は参与者 (participant) としての特徴を保持しているが、この〈完了〉文では最も「場」 (location または setting) らしいものとして捉えられる。

#### 4. *make* 構文と *have* 構文

本稿では、*have* 構文を「主語と目的語／補文事象が認知的に近い」または「主語が目的語／補文事象を持つ」という意味を表すものとして捉えてきた。本節では、*have* と同様、目的語や補文を伴って〈使役〉に解釈される *make* を取り上げ、両者間の違いが各スキーマの違いから生じることを見る。*make* 構文のスキーマを *have* 構文のものと対比させて考えると、「主語が目的語／補文事象を作り出す」ということになろう。中右・西村 (1998) はこの「彼ら」が「私がその話を全部繰り返す」という事態を「作り出した」という捉え方で (32) の例を説明している。

- (32) They made me repeat the whole story.  
 (中右・西村 1998 : 147)

ある事象を「作り出す」ときには、主語から事象、特にその中の参与者に対する強いコントロールが働いている。この使役性 (agentivity) もしくは他動性 (transitivity) の程度の違いは受動化の可否に影響しており、使役性の高い *make* 構文は受動化を許すが、使役

性の低い *have* 構文では許されない。

- (33) a. Mary made this doll.  
 a'. This doll was made by Mary.  
 b. Mommy made me eat my spinach.  
 b'. I was made to eat my spinach.
- (34) a. Mary has a doll.  
 a'. \*A doll is had by Mary.  
 b. Mommy had me eat my spinach.  
 b'. \*I was had to eat my spinach.

*have* 構文 (34) では, *Mary* と *a doll*, *Mommy* と「私がほうれん草を食べる」という事象が単に「近いところにある」というだけであり, 主語から目的語への他動性は低いので, その目的語を主語に据えて受動文を作ることはできない。他動性の重要な要素である参与者間のインターアクション (interaction of participants: Langacker 2000) が *have* 構文には欠けているのである。これらの *have* 構文の主語は有生物の参与者なので, (35) のような Langacker (1991) の setting-subject construction とは一線を画すと思われるが, 受動化できないという点で共通している。

- (35) a. Hillerman's latest novel features Jim Chee.  
 b. \*Jim Chee is featured by Hillerman's latest novel. (Langacker 1991: 70)

ここで取り上げる *make* 構文と *have* 構文のもう一つの相違点は, *make* の主語には無生物が問題なく生じるが, *have* の場合にはその例はあまり見られないことである。数少ない例においては, 補文に動詞の不定形ではなく *-ing* 形が現れる。

- (36) a. This medicine will make you feel better.  
 b. These pills will have you feeling better.
- (37) a. His latest book will make you laugh till your sides ache.  
 b. His latest book will have you laughing till your sides ache.

(『英語教育』2002. 11月号)

補文の動詞が *-ing* 形になっていることで, どんな意味が付与されているのだろうか。*-ing* 形がどんな働きをするのかについて, Langacker (1991) は次のように述べる。

... the progressive *-ing* does three things to a perfective verb stem: (1) it construes the event holistically (by suspending sequential scanning); (2) it confines the profile to an immediate scope of predication consisting of an internal series of component states; and (3) it construes these states at a level of abstraction that neutralizes their differences.

(Langacker 1991: 26)

*-ing* が付くことにより, 事態が一連の状態から成るまとまりとして holistically に捉えられるわけである。よって, 例えば (37b) の意味するところは「彼の最新の本は『あなたがお腹が痛くなるほど笑っている』という一連の状態を, 全体として持つでしょう」ということである。*make* 構文は〈使役〉の部分のみが前景化されて「笑わせる」という意味を表すが, *have* の場合は, ある程度の時間持続するプロセス (ongoing process) を「持つ」必要があり, その時間的な広がりを出すために *-ing* が付けられる。補文に *-ing* 形を許容するか否かは, *make* 構文と *have* 構文間のもう一つの相違点でもある。

- (38) a. \*The actress made her director eating out of her hand.  
 b. The actress had her director eating out of her hand. (Baron 1974: 308)

上で述べたように, *make* は〈使役〉の部分だけに焦点を当てるので, 時間的な広がりには焦点を当てる *-ing* 形とは相容れないのだと考えられる。

## 5. 結 語

本稿では *have* 構文において主語と目的語/補文事象が認知的に近いとはどういうことかを考察してきた。2節で見た *have*+目的語構文では, 主語と目的語の指示する人または物が同じ場所に存在していることで, 主語が目的語を所有し, ある場合には主語が目的語に対して力を行行使すが, 別の場合には主語が目的語によって影響されることもある。〈所有〉〈存在〉〈経験〉といった多様な意味が出てくるのは, 主語・目的語の性質と, 両者の関係が多様であることが原因である。

*have* が補文を伴う場合も, 〈使役〉〈経験〉〈完了〉に分類して検討したが, 主語の〈使役〉(働きかけ)



の部分に焦点が当たっているのか〈経験〉(影響)の部分に当たっているのか判断しにくい例があり、やはり「主語と補文事象に近い」とまでしか言えない。あるいは、補文事象は行為または状態を表すが、これを主語が所有しているとも言える。池上(1981: 186)が紹介しているザイラーの術語「行為の所有者」(possessor of an act)に相当する概念である。make 構文との相違点を検討することで、have 構文の特徴はさらに明確になる。〈使役〉の部分のみに焦点が当たる make 構文と異なり、have 構文ではある個人(目的語)に対する使役というよりは、補文事象全体を一つのまとまりとして所有し、時にはコントロールしていることを表す。-ing 形が make 構文の補文で使われず have 構文では使われるのも、have 構文では主語が補文全体をまとまりとして「持つ」ことの表れである。

## 注

- 1) (9b) で見た *have trouble* は、この一例である。
- 2) (10) の中では、*have a seat / a letter / lunch / dinner* などがこれに当たる。
- 3) この〈経験〉は、前節で考察した *have*+目的語構文の解釈の一つ〈経験〉とは異なるものである。前節の〈経験〉には、主語が目的語に対して働きかけをする場合も含めたが、*have*+補文構文の意味分類ではそれは〈使役〉と考えている。
- 4) 本稿の〈経験〉に相当する。
- 5) 通時的に見ると、完了形が確立する以前は *have*+目的語+*-ed* 形の形が使われていたことが池上(1981)で指摘されている。

## 参考文献

- Baron, Naomi S. (1974) "The Structure of English Causatives." *Lingua* 33, 299-342.
- Belvin, Robert. (1993) "The two causative *haves* are the two possessive *haves*." *CLS* 29, 61-75.
- Brugman, Claudia. (1996) "Mental Spaces, Constructional Meaning, and Pragmatic Ambiguity." *Spaces, Worlds, and Grammar*, ed. by Gills Fauconnier and Eve Sweetser, 29-56, Chicago: The University of Chicago Press.
- Dabrowska, Ewa. (1997) *Cognitive Semantics and the Polish Dative*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dieterich, Thomas G. (1975) "Causative *Have*." *CLS* 11, 165-176.
- 早瀬尚子. (2002) 『英語構文のカテゴリー形成 認知言語学の視点から』東京: 勁草書房.
- 池上嘉彦. (1981) 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館書店.
- . (2000) 『「日本語論」への招待』東京: 講談社.
- . (2002) 「〈モノ〉と〈コト〉, そして〈トコロ〉」
- 日本語における〈主観性〉をめぐる』『言語』12月号, 72-83.
- Ikegami, Yoshihiko. (1989) "'HAVE+object+past participle' and 'GET+object; past participle' in the SEU Corpus." *Meaning and Beyond: Ernst Leisi zum 70 Geburtstag* ed. by Udo Fries and Maritin Heusser, 197-213, Gunter Narr: Tubingen.
- Lakoff, George. (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor." *Metaphor and Thought*, 2nd edition ed. by Andrew Ortony, 202-251, Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: volume 2 Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- . (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter
- 牧野成一 (1978) 『ことばと空間』東京: 東海大学出版会.
- 益岡隆志. (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の *have* 構文について」『英語と日本語と: 林栄一教授還暦記念論文集』東京: くろしお出版.
- Miller, George A. and Philip N. Johnson-Laird. (1976) *Language and Perception*. Cambridge: Harvard University Press.
- 中村芳久. (2001) 「二重目的語構文の認知構造—構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—」『認知言語学論考 No. 1』東京: ひつじ書房.
- 中右 実・西村義樹. 『構文と事象構造』東京: 研究社出版.
- Palmer, F. R. (1974) *The English Verb*. New York: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen. (1993) "Deriving Causation." *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519-555.
- . (1997) "The function of *have*." *Lingua* 101: 295-321.
- 斎藤伸治. (2001) 「使役・経験の *have* と『させ』について」『意味と形のインターフェイス: 中右実教授還暦記念論文集 上巻』東京: くろしお出版.

## 語法事典

『英語語法大事典』24版 大修館書店.

## 文例出典

- 神谷久美子, 勝井信子 (1999) 『スモーク』by Paul Auster 松柏社.
- 広淵升彦 (1996) 『スヌーピーたちの言葉は泉のように』講談社.
- チャールズ M. シュルツ著, 谷川俊太郎訳 (2002) 『SNOOPY (1) 行くよ! 今行くよ!』角川書店.